

# 新入生オリエンテーションにおける獲得感と 大学生生活満足感との関連性について (2)

—— 複数学科のデータに基づく分析 ——

心理学科 佐久田祐子・奥田 亮・川上正浩・坂田浩之

抄録：大学教育が十全に実践されるためには、その初動時における体制の確立が重要である。坂田・佐久田・奥田・川上（2007）は、大学新入生に対して行われるオリエンテーション（FOP）において、学生が獲得したと感ずるさまざまなことが、大学生生活における満足度にどのように影響しているかを検討し、FOPにおける獲得感が、大学生生活満足度を高めていること、またその獲得感には、教員との親密化や帰属感高揚が強くかかわっていることを示唆している。しかしながら坂田他（2007）の研究は、単一の学科の単一のFOPのみをその分析対象としており、その結論の普遍性には疑問も残る。そこで本研究では、複数の学科におけるFOPを調査・分析の対象とし、FOPが大学生生活に与える、より普遍的な影響を明らかにすることを目的とした。3学部8学科のFOPを対象とした調査の結果、入学当初のフィット感や交友満足は、FOPそのものへの積極的な参加を促し、特に帰属感高揚や居心地の良さを通じて、以後の大学生生活充実感へとつながっていることが示された。以上のことから、効果的なFOPを考える上では、大学および所属学科への帰属感を高め、同時に参加して楽しいと思えるようなプログラムにも重点を置くべきであると言える。

キーワード：新入生オリエンテーション、大学生生活、満足感、大学教育

## 問題と目的

大学教育が十全に実践されるためには、その初動時における体制の確立が重要である。そのため、多くの大学では入学後の早い段階で、新入生オリエンテーションや新入生研修会、フレッシュマン・キャンプ、本学においては学外オリエンテーション（本研究ではこれらを総称して“新入生オリエンテーション [Fresher Orientation Program 以下略してFOP]”と呼ぶ）として、大学・学部・学科に関する様々な情報を提供したり、学部の専門性を伝えるような初期教育を行ったり、同級・上級生や教員らと関係を結んだりするような場や機会を与えている。

FOPは各大学において広く一般的に行われて

いる行事であるにもかかわらず、FOPの実施方法やその後の学生生活等への効果に関して実証的に調べた研究は、ほとんど見当たらない。FOPの検討は、単にFOPをいかに企画するかに止まらず、大学における導入教育、学生支援の効果的なあり方などについても示唆を与えるものがあると考えられる。そこで我々は、FOPで獲得されるさまざまな事柄が、学生の特徴や大学生生活にどのように関連・影響しているかについて実証的に調べることを目的として、一連の研究を行ってきた。

まず佐久田・奥田・川上・坂田（2003）では、FOPに対する態度の基礎データを収集する目的で、本学心理学科の学生が、FOPに対してどのような期待を持っているのか、またFOPを実際

に経験して何を得たのかについて調査を行った。その結果、学生の抱いている期待や獲得感に関する基礎データと、それらを構成する下位要素がどのように体系づけられているかが明らかにされた。

次に奥田・川上・坂田・佐久田（2003）では、上記の FOP に対する態度が個々の学生の personality とどのように関連しているのかを検討した。その結果、FOP を「楽しむ」企画として期待を寄せる側面と、FOP を対人関係等の端緒とすることに期待する側面が窺われ、特に後者の達成には personality の諸側面が様々に関与していることが示唆された。

川上・坂田・佐久田・奥田（2004）では、FOP に対する態度と学生の個人差（出身校；内部生 vs 外部生、居住形態；自宅生 vs 下宿生）との関連を検討した。その結果、内部生よりも外部生の方が、大学で親しい交友関係を築いたり、自分の生活の場についての情報が得られたりする機会をより積極的に強く求めていること、また FOP を企画として充実したものであると考えていることなどが示された。また居住形態は FOP に対する態度にあまり影響を与えていないことが明らかになった。

坂田・佐久田・奥田・川上（2005）では、異なった形態で行われた FOP に対する学生の態度の違いを調査するため、同じ本学心理学科の異なる年度（すなわち異なる実施形態）で行われた FOP を比較し検討を行った。その結果、(1) FOP が一泊二日で行われること（内容が豊かになること）と (2) FOP において“大学生活”情報を提示することという二つの点が、“FOP が大学への帰属感を高める行事であり、大学 4 年間を過ごす上で大切な情報を獲得できる機会である”という学生の認識を確かなものにする効果を持つことなどが示された。

坂田・佐久田・奥田・川上（2007）では、FOP に対する学生の獲得感が、大学生活における満足度にどのように影響しているかを、共分散構造分

析を用いて検討した。その結果、FOP における獲得感が、大学生生活満足度を高めていること、またこうした獲得感には、教員との親密化や帰属感高揚が強くかかわっていることが示唆された。

川上・坂田・佐久田・奥田（2005）や奥田・川上・坂田・佐久田（2006）では、それまでの研究で用いてきた学生の FOP に対する獲得感に関する尺度や大学生活への満足度を測定する尺度を改訂し、項目数を増やしてそれぞれの調査内容をより多面的に捉えることができるようにした。それぞれの尺度は「オリエンテーション成果」尺度、及び「大学生活充実度」尺度と命名され、これらを用いて調査を行ったところ、FOP において一回生同士が親密になることや学科への帰属感を高揚させることが、交友面よりも学業面や適応面での大学生活充実度を高めることが明らかにされた。

川上・坂田・佐久田・奥田（2007）では、これまで本学心理学科の新入生のみを対象に調査・分析されてきた大学生活充実度について、より普遍的な因子を抽出すべく、その調査対象を拡大し、1 回生から 4 回生のすべての学年に横断的に調査を行った。そして因子分析を行った結果、“フィット感”“交友満足”“学業満足”“不安”の 4 因子が抽出され、大学生活充実度尺度が 4 つの下位尺度によって構成されることが明らかとなった。

さらに佐久田・奥田・川上・坂田（2007）では、FOP 以前に新入生が感じている大学生活充実度も考慮し、FOP における成果が FOP 前後の大学生活充実度の変動にどのような影響を及ぼしているのかについて調査を行った。その結果、FOP において学科への帰属感が高まったり、教員との会話・交流が促進されたりすることによって、大学に対するフィット感が FOP 前後において高いレベルのまま維持されることが示された。

以上のように、我々はこれまで、FOP が学生や大学生活に対してどのように関連し寄与しているのかについて実証的に検討すべく、調査内容や方

法・手続き・尺度を改良しながら調査・研究を積み重ねてきた。しかし、さらに様々な面で研究方法を改良する余地はあると考えられる。その一つとして、とりわけこれまでの研究では、本学心理学科における FOP のみをその調査対象としていた点が挙げられる。その結果は一定の普遍的な要因を含むと推測されるとはいえ、単一学科の特定の FOP であることの影響を免れないであろう。そこで本研究では本学の心理学科以外の複数の学科における FOP も調査・分析の対象として研究を行うことにする。すなわち具体的な調査計画として、本学 8 学科の平成 19 年度新入生を対象に、佐久田他 (2007) に倣って FOP 実施前に大学生生活充実度尺度、FOP 直後に新入生オリエンテーション成果尺度、そしてその約 2 ヶ月後に再度大学生生活充実度尺度を実施する。これにより、FOP が大学生生活に与えるより普遍的な影響を明らかにすることができるかと期待される。

## 方法

### 調査対象者

大阪樟蔭女子大学学芸学部・人間科学部・短期大学部の 8 学科に所属する一回生が調査に参加した。4 月初旬に実施した調査 1 (大学生生活充実度尺度) における調査対象者は 608 名 (平均年齢: 18.2,  $SD=2.3$ ), 4 月中旬に実施した調査 2 (新入生オリエンテーション成果尺度) における調査対象者は 588 名 (平均年齢: 18.2,  $SD=2.3$ ), 6 月中旬に実施した調査 3 (大学生生活充実度尺度) における調査対象者は 544 名 (平均年齢: 18.3,  $SD=1.6$ ) であった。

なお、3 つの調査全てのデータについて対応がとれた調査対象者は 443 名 (平均年齢: 18.2,  $SD=1.7$ ) であった。

### 調査実施時期

2007 年 4 月～6 月

## 質問紙の構成と質問項目の作成

以下の 2 種類の尺度を配付した。

- ① 新入生オリエンテーション成果尺度: 奥田他 (2006) によって 46 項目で構成された、新入生たちが FOP を体験してどのように感じ、何を得たと思っているかを知るための尺度である。奥田他 (2006) においては、“一回生との親密化” “上回生との親密化” “帰属感高揚” “教員との親密化” “自己開示体験” “宿泊” “親友獲得” “情報獲得” の 8 つの因子が抽出されている。
  - ② 大学生生活充実度尺度: 川上他 (2005) によって 45 項目で構成された、大学への適合感や学業や人間関係を含めた大学生生活への充実感を測定する尺度である。川上他 (2007) が大学 1～4 回生のデータを対象に因子分析を行った結果から得られた“フィット感” “交友満足” “学業満足” “不安” の 4 つの下位尺度によって構成される。
- ①②いずれも 5 件法 (1: 全くあてはまらない～5: 非常によくあてはまる) で回答を求めた。

### 手続き

大学生生活充実度尺度は、入学直後 (授業開始約 1 週間後) およびその約 2 ヶ月後の 2 時点で、新入生オリエンテーション成果尺度はオリエンテーション実施直後の 4 月中旬に、いずれも授業時間内にて実施された。調査対象者には調査目的が説明され、了解の上で調査に参加することが求められた。この際、各調査対象者には各自のペースで回答することが求められた。

## 結果と考察

### 1. 新入生オリエンテーション成果尺度の因子分析

8 学科を通じて一回生が FOP から感じた成果が、どのような因子によって構成されているのか

表1 新入生オリエンテーション成果尺度 因子分析表

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX
<b>第1因子:一回生との親密化 (α=.898)</b>									
他の一回生と親しくなれた.	.933	.047	-.067	-.110	-.043	.163	-.001	-.045	-.085
他の一回生との会話が楽しかった.	.791	.047	.028	-.044	.005	-.026	-.030	.002	.068
他の一回生とあまり交流できなかった. (-)	-.788	-.046	-.076	-.073	.056	-.067	.113	.070	.132
友人関係の輪が広がった.	.623	-.077	-.005	.043	.046	.099	.183	.047	-.056
多くの人と親しくなれた.	.588	-.087	.052	.114	.039	.162	.196	-.024	-.079
楽しかった.	.521	-.012	.092	.146	.149	-.107	-.019	.065	.080
みんなで一緒に出かけるのが良かった.	.459	-.006	.016	.102	.127	.013	-.047	.190	.087
<b>第2因子:上回生との親密化 (α=.878)</b>									
上回生との会話が楽しかった.	-.003	.850	.003	-.020	.106	-.011	.055	-.037	-.060
上回生と今後役立ちそうな話ができ.	.002	.754	-.084	-.014	-.129	.101	.080	.078	.142
上回生がいて良かった.	.193	.752	-.097	-.124	.113	-.056	-.047	-.019	.123
上回生と親しくなれた.	-.090	.723	.071	.058	.057	.263	-.001	.002	-.136
上回生とあまり交流できなかった. (-)	.069	-.676	-.190	-.263	.117	.043	-.012	.043	.124
<b>第3因子:教員との親密化 (α=.837)</b>									
先生と親しくなれた.	.052	-.080	.847	.006	-.083	.015	-.026	-.026	.097
先生との会話が楽しかった	.025	-.056	.844	-.093	.099	-.102	-.056	.010	.066
先生とあまり交流できなかった. (-)	-.072	-.082	-.775	-.092	.029	.116	.123	.014	.154
先生と今後役立ちそうな話ができ.	-.043	.049	.513	-.063	-.052	.300	.102	.032	.115
先生について情報を得た.	-.089	.149	.489	-.228	.095	.030	.122	.133	.123
<b>第4因子:居心地の良さ (α=.867)</b>									
気詰まりだった. (-)	-.050	-.105	.029	-.836	.016	.156	.088	-.046	-.088
気疲れた. (-)	-.061	-.039	.108	-.730	.035	.027	.157	-.093	-.141
他の人とうまくしゃべれなかった. (-)	-.207	.055	-.040	-.673	.174	-.020	-.096	.074	.017
居心地が悪かった. (-)	-.313	-.021	.008	-.554	.058	.099	.057	-.046	-.046
他の人とのコミュニケーションがうまく取れた.	.194	-.047	.007	.463	.034	.154	.219	-.036	-.024
素直な自分を出せた.	-.090	-.064	-.019	.460	.250	.106	.210	.009	-.043
<b>第5因子:帰属感高揚 (α=.856)</b>									
この学科のよいところが見つかった.	.008	-.033	-.094	.051	.759	.180	-.094	.018	-.027
この学科の雰囲気を感じられた.	.000	.057	.028	-.218	.756	-.045	.018	.031	-.062
この学科の一員であるという意識が高まった.	.017	-.106	.021	-.004	.711	.355	-.147	.051	-.023
この学科により印象を持った.	.183	.102	.018	.017	.672	-.199	.039	-.127	-.016
この学科になじめそうな気がした.	.094	.012	.013	.150	.518	-.116	.162	-.025	.037
これからの大学生活を、やっていけそうな気がした.	.014	-.010	.051	.255	.470	-.134	.076	-.056	.162
<b>第6因子:情報獲得 (α=.561)</b>									
就職について情報を得た.	.150	-.045	-.004	-.085	-.126	.616	-.070	-.041	.216
大学の施設について情報を得た.	.019	.136	-.031	-.053	.174	.537	-.099	-.026	.133
学外の生活(バイト、サークルその他)について情報を得た.	.102	.113	-.097	-.036	.114	.454	-.021	.034	.078
<b>第7因子:親友獲得 (α=.891)</b>									
深くつきあっていけそうな人ができた.	.023	.089	-.028	-.028	.003	-.107	.881	-.056	.056
気の合う友人ができた.	.138	-.003	-.032	-.054	-.008	-.074	.852	.075	-.022
今後の大学生活を通してつきあえそうな友人ができた.	.265	.011	-.059	-.027	-.047	-.027	.715	.028	.040
<b>第8因子:宿泊肯定 (α=.827)</b>									
泊まりがけが良かった.	-.060	-.041	.019	.071	.079	.018	.032	.853	-.037
日帰りが良かった. (-)	-.047	-.030	-.017	-.031	.085	.052	.004	-.830	.098
<b>第9因子:将来展望獲得 (α=.598)</b>									
卒業するまでの大学生活の見通しが立った.	-.109	-.020	.108	.137	-.004	.270	.015	-.100	.583
自分の今後の大学生活がイメージできた.	.012	-.078	.081	.048	.106	.212	.113	-.074	.508
学科で取れる資格について情報を得た.	-.058	.138	-.083	.107	-.164	.394	-.041	.032	.501
因子相関	II	.209							
	III	.352	.449						
	IV	.669	.204	.373					
	V	.669	.339	.514	.630				
	VI	.048	.307	.257	.226	.218			
	VII	.656	.148	.371	.650	.677	.323		
	VIII	.355	.173	.201	.333	.353	-.033	.305	
	IX	.353	.295	.230	.193	.498	-.067	.270	.343

(-)は逆転項目

を改めて捉えるために、新入生オリエンテーション成果尺度46項目に関して主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。因子数は、固有値1以上であることと解釈可能性から決定し、どの因子についても因子負荷量が.40未満の項目と複数の因子の負荷量が.40以上の項目を省き、再度因子分析を行い、再度項目を省くことを繰り返した結果、最終的に9因子を抽出した(表1)。

第1因子は、「他の一回生との会話が楽しかった」「他の一回生と親しくなれた」などの項目に負荷が高く、主に一回生同士で親密になれたかどうかに関する因子と考えられるため、「一回生との親密化」因子と命名した。第2因子は、「上回生との会話が楽しかった」「上回生と今後役立つような話ができた」などの項目に負荷が高く、上回生とのつながりが出来たかどうかに関する因子と考えられるため「上回生との親密化」因子と命名した。第3因子は、「先生と親しくなれた」「先生との会話が楽しかった」などの項目に負荷が高く、教員との関わりが成立したかどうかに関する因子であると考えられるため「教員との親密化」因子と命名した。第4因子は、「気詰まりだった(逆転項目)」「気疲れした(逆転項目)」などの項目に負荷が高く、FOPにおいて緊張や疲労感をあまり感じずに居心地良く過ごすことができたかどうかに関する因子と考えられるため、「居心地の良さ」因子と命名した。第5因子は、「この学科のよいところが見つかった」「この学科の雰囲気を感じられた」などの項目に負荷が高く、所属学科への帰属感が高まったかどうかに関する因子であると考えられるため「帰属感高揚」因子と命名した。第6因子は、「就職について情報を得た」「大学の施設について情報を得た」などの項目に負荷が高く、情報の獲得に関する因子と考えられるため、「情報獲得」因子と命名した。第7因子は、「深くつきあっていけそうな人ができた」「気の合う友人ができた」などの項目に負荷が高く、学科の中で親友ができたかどうかに関する因子と

考えられるため、「親友獲得」因子と命名した。第8因子は、「泊りがけが良かった」「日帰りが良かった(逆転項目)」という項目に負荷が高く、FOPで宿泊することに肯定的であるかどうかに関する因子であると考えられるため「宿泊肯定」因子と命名した。第9因子は、「卒業するまでの大学生活の見通しが立った」「自分の今後の大学生活がイメージできた」などの項目に負荷が高く、FOPに参加して大学生活やその後の将来に対する展望が抱けたかどうかに関する因子であると考えられるため「将来展望獲得」因子と命名した。

各因子に負荷の高い項目によって下位尺度を構成し、各下位尺度の内的整合性を検討するため $\alpha$ 係数を算出したところ、「情報獲得」尺度( $\alpha = .561$ )と「将来展望獲得」尺度( $\alpha = .598$ )以外は全て $\alpha = .80$ 以上の十分な値が得られた(表1)。「情報獲得」尺度と「将来展望獲得」尺度の $\alpha$ 係数は若干低い値であったが、FOPの成果について検討する上で、これらの尺度で測定される側面は重要であると考え、本研究の以後の分析においては、その内的整合性の低さを考慮に入れつつ、これらの尺度を採用することにした。次に、調査対象者毎に各下位尺度の平均得点を算出し、それぞれ「一回生との親密化」得点、「上回生との親密化」得点、「教員との親密化」得点、「居心地の良さ」得点、「帰属感高揚」得点、「情報獲得」得点、「親友獲得」得点、「宿泊肯定」得点、「将来展望獲得」得点とした。各下位尺度得点の平均値を表2に示す。

## 2.2 時点における大学生生活充実度の分析

大学生生活充実度尺度に関しては、川上他(2007)において、大学1~4回生のデータを対象とした因子分析に基づいて、大学4年間の任意の時点における大学生生活充実度を測定するための尺度構成が行われている。そこで、本研究では、1回目および2回目の調査によって得られたデータを用いて、川上他(2007)に従って、「フィット感」「交

表2 新入生オリエンテーション成果尺度下位尺度の  
平均値と標準偏差

	平均値 (SD)
一回生との親密化	3.98 (0.75)
上回生との親密化	3.26 (0.85)
教員との親密化	3.33 (0.73)
居心地の良さ	3.47 (0.79)
帰属感高揚	3.68 (0.63)
情報獲得	2.76 (0.74)
親友獲得	3.86 (0.82)
宿泊肯定	3.20 (1.23)
将来展望獲得	3.20 (0.66)

表3 大学生生活充実度尺度下位尺度の平均値と標準偏差

1回目調査	平均値 (SD)	2回目調査	平均値 (SD)
フィット感1	3.29 (0.56)	フィット感2	3.09 (0.67)
交友満足1	3.61 (0.73)	交友満足2	3.68 (0.75)
学業満足1	3.63 (0.64)	学業満足2	3.37 (0.74)
不安1	3.29 (0.78)	不安2	3.35 (0.81)

友満足”“学業満足”“不安”の各下位尺度得点を算出した（以下、1回目の調査データによる下位尺度得点を“フィット感1”“交友満足1”“学業満足1”“不安1”と表記し、2回目の調査データによる下位尺度得点を“フィット感2”“交友満足2”“学業満足2”“不安2”と表記する。各下位尺度の $\alpha$ 係数は、順に.888, .903, .805, .673, .916, .906, .844, .753であり、十分な値が得られた）。各下位尺度得点の平均値を表3に示す。

次に、入学当初の大学生生活充実度（以下S1）とその2ヵ月後の充実度（以下S2）の関係を明らかにするため、相関係数を算出した（表4）。その結果、フィット感、交友満足、学業満足、不安のすべての下位尺度において入学初期と2ヵ月後の値に比較的強い正の相関が認められた（いずれも $p < .001$ ）。すなわち、入学初期の充実度が高い者は、後の大学生活においても充実度は高く、

初期に低い者は継続して低い値である傾向があるということである。

このことは、大学生生活充実度（S2）にFOPが与えた効果を検証する上で、FOP実施前である入学初期の充実度（S1）も含めて分析する必要性を示している。しかしながら、大学生生活充実度尺度の変化量はその初期値に依存し、分析結果に天井効果および床効果を反映させる可能性が高い。また、大学生生活充実度の初期値がFOPに対する態度、すなわち新入生オリエンテーション成果尺度の得点に影響を及ぼす可能性も考えられる。以上を鑑みて、S1が新入生オリエンテーション成果尺度に影響を与え、新入生オリエンテーション成果尺度がS2に影響を与えるという仮説のもとに分析を行うこととする。

#### 4. 新入生オリエンテーション成果尺度と大学生生活充実度尺度の関係分析

入学当初の大学生生活充実度（S1）がFOPの獲得感に及ぼす影響、またFOPの獲得感がその後の大学生生活充実度（S2）に及ぼす影響を明らかにするため、S1各下位尺度を説明変数、新入生オリエンテーション成果尺度の各下位尺度を従属変数とした重回帰分析、また新入生オリエンテーション成果尺度の各下位尺度を説明変数、S2各下位尺度を従属変数とした重回帰分析を繰り返し実施した（図1）。なお、本分析では調査対象学科全体の傾向を把握することを目的としているため、学科によって異なる意味合いを持つ下位尺度（新入生オリエンテーション成果尺度の“宿泊”および“上回生との親密化”）は除外して分析を行った<sup>(1)</sup>。

表4 大学生生活充実度（S1およびS2）の相関

フィット感1—フィット感2	交友満足1—交友満足2	学業満足1—学業満足2	不安1—不安2
.683	.559	.666	.546

(1) ライフプランニング学科は2007年度開設学科のため、調査時点で上回生が存在していない。また、児童学科のみ宿泊を伴わない形態でFOPが実施された。

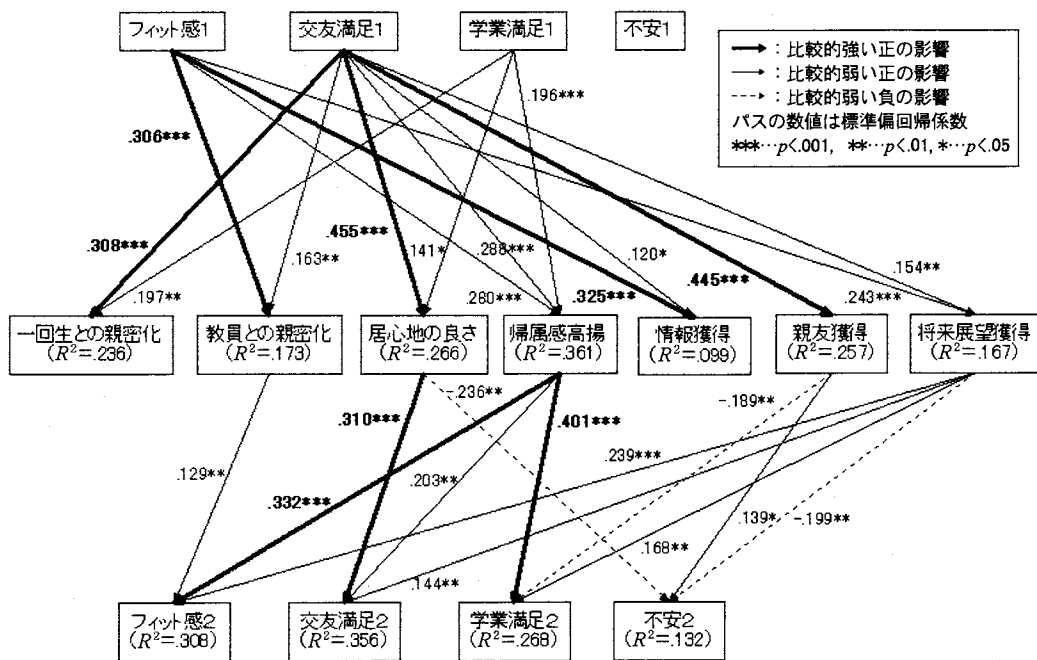


図1 重回帰分析によるS1, 新入生オリエンテーション成果尺度, S2 のパス図

S1 から新入生オリエンテーション成果尺度へのパスを見ると、“フィット感1”は“教員との親密化”および“情報獲得”に対して、“交友満足1”は“一回生との親密化”、“居心地の良さ”および“親友獲得”に対して、それぞれ強い正の影響を与えていることがわかる。

“情報獲得”を構成する要因、すなわち就職や学内の施設に関する情報は、交流や学科の説明を目的として作られた FOP プログラムからは得ることが難しい。これは表 2 に示されている通り、“情報獲得”が平均値 3.00 を下回っていることから明らかである。同様に、“教員との親密化”が一回生や上回生とのそれよりも平均値の低いことを併せて考えると、“情報獲得”および“教員との親密化”の両者は比較的獲得しにくいものであると言える。このような入手困難とされるものであっても、入学当初のフィット感が高いこと、すなわち早い段階で所属学科に適応的であることにより FOP に対する積極的な姿勢での参加につながり、獲得が促進されるのだと推察される。

“交友満足1”が FOP での円滑な友人関係形成や居心地の良さに結びつくという今回の結果は、参加前から仲の良い友人がいるかどうかで、FOP に対する参加のしやすさ、緊張や気遣いに差がみられるということ、仲の良い友人を通じての輪が広がりやすいことなど、自然な流れを表していると言える。一方で、入学から 2 週間という短い期間で友人関係に満足できる者が、FOP においても友人の幅を広げ、あるいは深めることができるというのは、ある程度個人の特性を反映しているとも考えられる。

次に、新入生オリエンテーション成果尺度から S2 へのパスを見ると、“居心地の良さ”から“交友満足2”へ、“帰属感高揚”から“フィット感2”および“学業満足2”へそれぞれ強い正の影響を与えていることがわかる。言い換えると、“不安2”を除いた大学生活充実度を高める要因は、FOP から得られた“居心地の良さ”と“帰属感高揚”だということである。

“居心地の良さ”が後の交友満足度を高めるこ

とが確認された一方で、“一回生との親密化”“親友獲得”といった交友関係の要因が後の交友満足度に及ぼす影響は認められなかった。このことは、FOPを通じて得られた友人関係があまり持続しない可能性を示唆している。FOPの実施時期が入学初期であることの意義の一つには、後の大学生活における対人関係形成を円滑にするためのきっかけ作りが含まれているが、今回の結果を見る限り、そのような機能を期待し過ぎることは望ましくないようである。とりわけ一年次の交友満足度は、必修科目の語学など、少人数クラスでの人間関係の影響を多大に受ける可能性が高い。FOPをきっかけに仲良くなれた友人がいたとしても、少人数クラスが異なれば必然的に接触の機会も少なく、関係が持続しにくいのであろう。

また、“フィット感2”および“学業満足2”を高める要因は、交友関係に関する獲得感ではなく帰属感であった。フィット感のみならず学業満足度も高めるといえるのは、帰属感の高まりが、受講している授業、ひいては学科の履修プログラムに対する前向きな姿勢を導くのではないかと思われる。

なお、図1より本分析における重決定係数 $R^2$ の値はいずれも有意ではあるものの.361~.099とかなり低いことがわかる。 $R^2$ が低いということは、重回帰式の当てはまりの悪さ、モデル全体の説明力の低さを意味することになるが、FOPによる獲得感のみで大学生活充実度の大部分を説明するほうが不自然であり、数ある要因の1つであるFOPの影響についての分析であると捉えれば、当然の結果であると言えよう。

## 総合考察

本研究では、FOPと大学生活における充実度との関連を検討するにあたり、単一大学の3つの

学部、8つの学科にわたって質問紙調査を実施した。これまで単一の学科で実施された質問紙調査に基づいた分析においては、FOPにおける8つの因子が見いだされたが、複数の学科を対象にした今回の分析においては、“自己開示体験”因子については消滅したものの、それ以外の7つの因子は安定して見出され、これに“居心地の良さ”、“将来展望獲得”の2つを加えた9因子構造となっている。こうした変動の小ささから見ても、今回得られた因子構造は、一般的なFOPに対して適用可能なものであると考えることができる。

入学当初のフィット感や交友満足は、FOPそのものへの積極的な参加を促し、特に帰属感高揚や居心地の良さを通じて、以後の大学生活充実感へとつながっていることが見て取れる。このことから、効果的なFOPを考える上では、単に交友関係を深めるためだけでなく、大学および所属学科への帰属感を高め、同時に参加して楽しいと思えるようなプログラムに重点を置くことが重要であると言えよう。

最後に、今後の課題として以下の点が挙げられるであろう。まず、本研究ではこれまで単一の学科に対し実施していたFOPの調査を複数学科に拡大したが、今回の調査結果から得られた傾向が調査対象の大学（すなわち本学）特有の傾向なのか、大学一般に普遍的に共通するようなものなのかを検討するため、他大学のFOPもさらに調査対象としていくことが必要であると考えられる。また実践的な観点からは、一連の研究結果を踏まえたFOPを実施し再び調査を行う、といったプロセスを繰り返すことで、より効果的なFOPを実施していくことが重要であろう。そしてそのようなFOPを含めた初動教育全体の在り方についても、研究の視野に入れていくことが必要であると思われる。



## 引用文献

- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮 (2004). 個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 (3) - 出身校, 居住形態との関連から - 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 3, 57-68.
- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮 (2005). 新入生オリエンテーションに関する研究 (1) 日本心理学会第 69 会大会発表論文集, 1251.
- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮 (2007). 大学生生活充実度における学年差に関する研究 日本教育心理学会 第 49 回総会発表論文集, 71.
- 奥田亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子 (2003). 個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 (2) - personality との関連から - 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 2, 73-82.
- 奥田亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子 (2006). 新入生オリエンテーションに関する研究 (2) オリエンテーション成果が大学生生活充実度に及ぼす影響 日本心理学会第 70 会大会発表論文集, 1254.
- 坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮・川上正浩 (2005). オリエンテーション形態が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 4, 75-86.
- 坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮・川上正浩 (2007). 新入生オリエンテーションにおける獲得感と大学生生活満足感との関連性について 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 6, 59-71.
- 佐久田祐子・奥田亮・川上正浩・坂田浩之 (2003). 個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 (1) - オリエンテーションに対する態度の基礎データ - 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 2, 59-71.
- 佐久田祐子・奥田亮・川上正浩・坂田浩之 (2007). 新入生オリエンテーションに関する研究 (3) オリエンテーション成果が大学生生活充実度の変動に及ぼす影響 日本心理学会第 71 会大会発表論文集, 1169.

# The Relationship between the Gain in FOP (Fresher Orientation Program) and University Life Satisfaction (2)

— The analysis on the data from several departments —

Osaka Shoin Women's University

*Yuko SAKUTA, Akira OKUDA,  
Masahiro KAWAKAMI, & Hiroyuki SAKATA*

## ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate relationships between the gain they recognize to have got in their fresher orientation program (FOP) experience and their satisfaction with the university. Sakata, Okuda, Kawakami & Sakuta (2007) showed causal relationships between the FOP experience and university satisfaction. As the previous study (Sakata, *et.al.*, 2007) analyzed the data of only single case of FOP in a particular department, it is not certain that the conclusion of the study has universal validity. Therefore in this study, we investigated the relationship between the gain in FOP and university life satisfaction in several departments. Participants, 588 university freshers of 8 departments over 3 faculties, were asked to rate items concerning university satisfaction at two points in time: 1) before FOP at the beginning of the semester and 2) about two months after the FOP. They were also asked to rate items on the gain in FOP soon after their FOP experience. A multiple linear regression analysis was applied to investigate causal relationships among the components. The result of the analysis indicated that sense of fit and satisfaction with social relationships facilitates the positive commitment to the FOP and that leads to university satisfaction mediating sense of belonging and comfortableness. In conclusion, when planning and conducting an effective FOP, we should consider ways to raise students' sense of belonging to the department and university and to make the FOP enjoyable for students.

**Keywords:** fresher orientation program (FOP), student life, satisfaction, university education